
平成陰陽記

aki

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

平成陰陽記

【コード】

N0284V

【作者名】

aki

【あらすじ】

もし現代に陰陽師がいたら？二人の陰陽師が遭遇する怪異の連続。

プロローグ（前書き）

ありきたりと言われても書き続けます。駄文ですが読んでいただくと嬉しいです。

プロローグ

「本当にここに幽霊が出るの？」

清明は震える声で、隣を歩く満夜まよに聞いた。

「目撃情報があるのよ。ハル、もしかして怖いのか？」

「そりゃあ怖いよ」

「じゃあ帰ってもいいよ？私一人でなんとかするから」

「帰らないよ」

「なんで？怖いんですよ？」

「だって・・・」

その時、二人の前に数体の鎧を着た幽霊が現れた。それを見た清明はポケットから複雑な模様の描かれた札を取り出し、幽霊に向かって投げ、幽霊に札が張り付いたとき、「滅」と唱えた。

すると、幽霊は消滅した。それを確認し、清明は続きを言った。

「だって僕たち陰陽師は妖怪やお化けを退治するのが仕事なんだよ？怖いからって帰るわけにはいかないよ。」

廃ビルの幽霊

事の発端はその日の朝、京都府某所にある六道学園りくどうがくえん高等部の教室で起きた。

「廃ビルに幽霊？」

「見た人が何人もいるの。それに、隣町の中学生が何人か探検に行つたままいなくなつちやつたんだって」

「満夜ちゃんの家つて、先祖代々お化け退治の専門家なんでしょ？なんとかならないかな？私たちあの前を通らないと家に帰れないんだけど怖くって」

「・・・どうして僕と一緒に来てるんだろ・・・」

「名前が『安倍清明』だからじゃない？うちのご先祖よりあんなのご先祖のほうが有名だしね」

「それでも満夜がバラさなかつたら珍しい名前だっただけですんだと思うけどなあ」

「文句を言ってる間に着いたみたいよ」

「そういつて満夜は持っていた懐中電灯で目の前の扉を照らした。」

「んっ・・・。固い扉だなあ。満夜、手伝って」

二人で引いてもビクともしない。

「仕方ない。壊しちゃおう。満夜、結界を張って」

満夜は一步下がり、呪文を唱えた。

「OKよ。」

清明は満夜の言葉に頷き右手を扉にあててつぶやいた。

「碎」

鉄製の扉が音を立てて崩れ、二人は扉の残骸をまたいで部屋に入つた。

「薄暗いなあ」

「地下室にしては明るいほうじゃない？それよりも、ここで合つて

るんでしょうね?」

「信じられないなら満夜が自分で占じればいいでしょ」

「占とか予知は苦手なのよ。・・・!ハル、あれ見て」

満夜が指差した先には、数人の少年が倒れていた。

「死んでるの?」

「死んではないわ。みんな眠ってるだけみたい。」

倒れている少年たちの脈をとり満夜が言う。その後ろにいくつもの『影』が近づいていた。

「・・・ねえ満夜。ここが廃ビルになった原因ってなんだっけ?」

「十年くらい前に銀行強盗があつて、犯人たちのアジトだったこのビルに警察が踏み込んだ時にはなぜか一人以外は死んじやつて、最後の一人も隠し持ってた爆弾で警察官もろとも爆死。で、その次の年くらいから幽霊が出るって噂がひろまって人が寄り付かなくなつたって聞いたけど、それがどうかしたの?」

「う、後ろ・・・。」

「後ろ?」

満夜が後ろを向くと、二、三十体の血まみれの幽霊がいた。

「げっ」

「この人たちみんな強盗さん?」

「そうみたいね」

一体の幽霊が口を開いた。

『俺が生き残った。金は俺のもんだ。邪魔する奴は殺す』

「もしかして仲間割れ?」

「面倒だなあ。これじゃあ怨念が濃すぎるから、ビル全体を浄化しなきゃいけないよ」

「どのくらいかかる?」

「完全に浄化するなら五分、この人たちを弱めて無害にするだけでいいなら三分かな」

「じゃあ五分もたせるから浄化してね」

満夜が手をかざすと清明を中心に倒れている少年たちを囲む結界

ができ、二人は短く呪文を唱えた。

「オン」

すると、清明の手には大小合わせて千八十個の水晶でできた数珠が、満夜の手には白銀の槍が現れた。

「謹んで勸請し奉る・・・」

清明の口から発せられる神呪と共にビルの中の空気が凄烈なものに変わっていく。

それを感じながら満夜は幽霊を薙ぎ払うが、一体が槍をかいくぐり満夜の背後に迫り、満夜が気づいた時には、彼女のすぐ後ろにいた。

「あつ！！」

「・・・神の息吹よ、さまよう魂に永久の安息を与え、現の苦しみから解き放ちたまえ」

パンパンッ。

清明の唱えていた神呪が完成し、柏手が響く。

柏手の音と共に幽霊たちの姿が薄れだし、あつという間にすべての幽霊が消え去った。

「大丈夫？」

「わたしは大丈夫よ。それよりも、この人たちはどうする？」

「外に運んで、警察に通報すればいいんじゃない？」

「通報だけでいいのかしら」

「連れて行ったりしたら、ややこしい事になるでしょ？それに本当のことを言っても信じてもらえないだろうしね」

「それもそうね」

二人は倒れている少年たちを外へ運び出すと、近くにあった公衆電話で警察に通報し、パトカーのサイレンの音が近づいてくるのを確認してその場を離れた。

翌日

翌朝満夜は、教室に入った途端にクラスメイトに囲まれた。

「今朝のニユースで、廃ビルでいなくなった人達が見つかったって
言ってたけど、満夜ちゃんが見つけたの？」

「お化けはいたの？」

満夜は自分の席に着き、カバンを机に置いてから答えた。

「ハルと一緒に行って調べたけど、幽霊なんていなかったわよ」

「セイメイ、お前あしや蘆屋さんと二人で幽霊ビルに行ったのか？」

満夜のセリフを聞いた一人の男子生徒が清明に声をかけた。

「行ったよ」

清明は読んでいる本から顔を上げずに答えた。

「二人つきりで？」

男子生徒は清明の顔を自分のほうに向けさせ、もう一度訊いた。

「うん。それがどうかしたの？」

「どうかしたのって、お前なあ……。あの蘆屋さんと二人つきりだぞ
？」

「うん」

「羨ましいじゃねえか。なあ、マサル」

「タケシの言う通りだぞ、ハル」

タケシの隣にいるマサルがタケシの言葉に賛同した。

「頭脳明晰、容姿端麗、スポーツ万能。非の打ちどころのない美少
女だぜ？」

「ちよつと大げさだよ」

「何を言ってるんだ？この間の定期試験で、英語の石川が嫌がらせ
で出題した東大入試レベルの問題に正解した頭脳、流れるような美
しい黒髪、パツチリとした目、スラツとした脚、小さすぎず大き
すぎない、ちょうどいい大きさの胸とお尻。どこをとっても素晴らし
いじゃないか」

「幼馴染で、小さな頃から一緒だから、そんな風に考えたことないよ。それに、髪は満夜だけじゃなくてみんな綺麗だと思うけどなあ」
清明は自分の白い髪に触れながら言った。

「あ……。悪い。お前の髪のことを忘れてた」
マサルが謝る。

「謝らなくていいよ。気にしてないし、僕はこの髪、けっこう気に入ってるからね」

「話は変わるけど、セイメイの家も蘆屋さんの家も陰陽師で、大昔はライバルだったんだろ？なんで二人は仲がいいんだ？」

「二人は中等部からこの学園に入ったけど、僕らの三分の二くらいは初等部からこの学園にいるんだ」

「確かに中等部や高等部から入った奴って少ないな」

「初等部からの子たちは大抵知ってるんだけど、僕はこの髪の色をせいでいじめられてたんだ。初等部の二年の頃にね」

「なんでだ？ただ髪の色が違うだけだろ？」

「僕だって理由はわからないよ。ただ、僕をいじめてたのがクラスノボスだったから皆逆らえずに一緒に僕をいじめてたんだ」

「最悪の奴らだな」

「どつちが？」

「両方だ」

マサルとタケシの声が重なる。

「俺は特に一緒になってたっていうほうが酷いとおもうけどな。そういうやつに限って自分が標的になったら周りに助けを求めるから」

マサルは苦々しげに付け加えた。

「ええっと…続けていい？」

「ああ、すまない。話が逸れたな」

「皆にいじめられてたっていう所まで話したよね。そのときに満夜だけが僕を庇ってくれたんだ。髪も『雪みたいで綺麗』って褒めてくれてね。その頃からかな。仲良くなり始めたのは」

「家でそのことを話したら『安倍の子とは付き合つな』って怒られ

たけどね」

満夜が話に割り込んできた。

「どうして？」

「さつき森君が言ったじゃない。私の家とハルの家は昔からライバルだった、って。実は、今もそうなのよ」

「厳密には満夜のお祖父さんと僕のじいちゃんだけが互いにライバル視してるだけなんだけどね」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0284v/>

平成陰陽記

2011年11月20日19時15分発行